
ようこそ異世界へ！

創輝 咲弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ異世界へ！

【Nコード】

N9250Z

【作者名】

創輝 咲弥

【あらすじ】

この世で、交通事故に遭い、死んだ佐々木 小羽斗
彼は、ある人物のおかげで転生した
そして着た場所が…魔法の世界？

説明（次回から本編）（前書き）

今回は説明です

説明（次回から本編）

この世で平凡に暮らしている佐々木ささき 小羽斗こはくとはある日、交通事故に遭った

彼は死んだ、しかし、彼は事故に遭った後、夢の中みたいな変な空間で、こんな声を聞いたのだった…

魔法の世界で繰り広げられるコメディーあり、恋愛あり??
百合百合いっぱい！そのほかいっぱい！でいく転生物語！！

この小説を読む上で重要なこと！

その壱 細かい事は気にした方が負け！w

その弐 そんなに上手く小説書いてない!?

その参 更新スピードの遅さ！！

以上の事が大丈夫の方はどうぞ！！
無理いゝって方も何とかしてどうぞ！！

ようこそ魔法の世界へ！

俺は死んだ？

ああ、死んだ、だって車に轢かれたから

さあどうしたもんか…

転生とか無いかな？

あれば絶対やるのに、どんなのに転生しようとも

そう考えているとあたりが真っ白に光った

光は次第に小さくなり見えてきたのは真っ白なところだった

「なんだここ？」

そう呟いたそしたら何処からか声が聞こえてきた

「ねえ、転生したい？いや、してもらおうね」

「え？」

「だから、あなたに転生してもらうは、まあ好意としてあなたの面影とか、いろいろ設定させてもらうから、安心しなさい、じゃあ」

え、だからなんなんだ？

なへやだった

なんだろう、豪邸の家の部屋だろうか？

そこで俺はあの声を思い出した

そうだ！なんだったんだあの声は、もしかして俺、転生したのか？？

そんな大発見をしてもう脳がパニックになりそうになった時、ソファーに女の子が座っているのに気がついた

ん？寝ているのかなあ？

自分は女の子の近くに行つて様子を見てみた

誰だろう？ん？良く見てみれば、耳が生えている…猫耳？ついでに赤色の髪の毛、

そして服装は、メイド服？

この子メイドなのかな？

どうしようか、おでこでも突いてみようかな？

そして俺は女の子のおでこを突いた、

反応なし、かあく、次は頬っぺたでも触ろうか

プニプニプニプニ

気持ちイ、じゃなくて！…起きないなあ

どうしようか…そうだ

プニプニプニプニプニプニプニプニプニプニ……

ずっと起きるまで触ることにしよう

「ん〜…へ？」

そんな事をしていると女の子が目を開けた…

あ、起きた…あ、この状況…どう説明しよう

そう今の状況、ソファアに座っている女の子の前に床に膝で立って
頬つぺたを触っている俺

「あ、えつと、そのお〜…おはよう」

これしか言えないや…

「あ、おはようございます…えつと、私、寝てしまっていましたか
…ごめんなさい、私は、あなた担当のメイドでございます、主にご
主人様にこの世界での説明やその他もろもろを教えて差し上げます」

「そ、そうなんだ…え？つて、ここどこなの？もしかして転生した
の？」

急になんかひらめいた、なんでさっきまで思いつかなかったんだ

「はい、そうです、ここは、魔法の世界のアイリーナ国です、そし
てあなたはここで戦ってもらう兵士です」

そうなんだ、俺、魔法の世界に転生したんだ、てことは、魔法を

使えるのかな（わくわく）

「あ、そうでした、まだご主人様は自分の姿を見てませんね」

そう言っただけ渡されたのは手鏡、私はそれを覗き込んだ

「え、うそ？これが自分？」

そこに居たのは…金髪でツインテールの女の子だった

これが俺？女の子?!…性転換もしたの…

「ご主人様、あなたはこの国の兵士となってもらいます、大丈夫です、あなたは人間、この世界では有力な強い種族です」

そんな事言われても…いや、まだ強いならいいか、でもなんで兵士なんだ？

「そうですねー、それはこの国が今、隣の国と戦争をしているからです」

そうなんだ、あれ？今、心読まれた？

「ふふっ、ご主人様が考えたことなら近くに居れば私の中ではそのまま聞こえるのです」

へえ〜そうなんだ…これも聞こえてる？そう聞いたらコクツと頷いたのでそうらしい

「ところであなたの名前はなんて言っの？」

あれ？喋り方が女口調になっている、まあ女の子なんだし丁度いいね

「あ、まだでしたか、すみません、私の名前は、ルーニャと申します」

「そう、ルーニャちゃんね、よろしくお願いします」

うん、可愛いなあ、ルーニャちゃんは

「聞こえていますよ、ふふっ」

「うーそっただけ分かるなんてせこいよ〜」

そんなことを言っただけ分かって苦情を言ったがどうにかなるわけではない

「そうだ、ご主人様のお名前は…たしかあ〜コバトさん、でしたかね？国王様に付けていただいたお名前です、良いですね」

「うん、そうだね…そうだ、さっき言っただけ兵士になるやつだけど…弱いと思うけどやっていい？」

「もちろんですとも、やっていただけて光栄です、あと、戦い方や体力などはこれから私と一緒に練習していきましょうね、私の役目の1つです」

そうか、なら心配なさそうだね…あ

「ねえ、その練習って難しい？」

「そうですねえ、まあ多少大変ではありますがご主人様は人間ですからすぐになれると思います」

「そっか、ありがとう」

うん…まあいつか…サボりたいときはサボろう

「ふふ、駄目ですよ？サボろうとするならお仕置きしますから」

「はい、たぶんサボりません」

あゝ可愛い、まあまじめにやってお手伝いでもしましょうか

「そうでしたそうでした、起きたら国王様に挨拶に行かなければなりません、とりあえずこの服に着替えてもらってもいいですか？」

そう言われてもらった服は半袖、スカートに、羽織るもの、どれもきれいなものだった

「うん、じゃあ着替えるね…」

あう、上手く着れないや…だって、戦いに適した服なのか知らないけどベルトとかスカートとか難しいもん…

「ご主人様、手伝ってあげましょうか？」

「だ、大丈夫よ、子供じゃないんだから一人でできるもん！」

国王、このひとなんかヤバイ！

私は結局一人じゃ着替えられず、ルーニヤの手を借りることになった

「さあ行きましようか、国王様の所へ」

「うん」

国王ってどんな人だろう、やっぱり偉い人なんだよな、まあ失礼が無いようにしないと

しばらく廊下を歩いてたら、あるきれいな扉があるところで止まった

コンコン

「失礼します、コバト様をお連れしました」

「失礼します」

たぶんここが王室なんだろう、どれもかしこもきれいなものでできている

そして国王様は…すごい美人だった、もちろん女の人ですよ

「あなたがコバトさんね」

「はい、そうです、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく、にしてもコバトちゃんは可愛いわね、ルーニヤちゃん、コバトちゃん頂戴」

いきなり可愛いなど言われたので顔が熱くなったのがわかった別に照れてなんかないから

「国王様、さすがにコバト様はあげません、大事な戦力と私のご主人様ですから」

ルーニヤちゃん、嬉しいよお〜そんなに私の事を思っていてくれたなんて!!

「そう、じゃあしょうが無いわね…そうだ、まだ名前を言ってなかったわね、

私は、ナノファアーノよ、よろしくね」

ナノファアーノさんかやさしそうな人だな

国王様がこの方で良かった

「ルーニヤちゃん、コバトちゃんに他の人間にあわせてあげて、そのあとはお出かけしてらっしゃい
夜のご飯は一緒に食べましょうね」

「はい、わかりました国王様、では失礼いたします」

「失礼します」

そうやって王室をでた後はルーニヤちゃんに連れられて私の部屋の近くの部屋の前に来た

「ご主人様、ここにあなたと同じ人間が居ます、自由にお話をしていただいていたのでごゆっくりしてください」

そういうと扉を開けて挨拶をしつつ入った

「こんにちはルーニャさん」

そう返事した彼が人間だろうか、髪の毛の色が銀で肌が白く整った天子のような人だった

「はじめまして、私は最近転生してきたコバトと申します、よろしくお願いします」

「はじめまして、俺はサシユランと申します、転生してから1年ぐらいです、解らないことがあった時はなんでも聞いてください、あと、…可愛いですね」

「へ、あ、あ、ああ、ありがとう…」

顔が真っ赤だどうしよう、恥ずかしいよお

「顔真っ赤だよ、恥ずかしいのかな？」

「ち、違うんだから！恥ずかしくないんだから」

「ご主人様、さすがにからかい過ぎです、コバトさんが可哀想です」

う、だれだろう私を助けてくれたのは、いや、もともと大丈夫だったもん

「ああ、すまない、で、おまえまだ挨拶してないだろ、さあしろ」

「はい、私はサシユラン様にお仕えするレヒューノです、よろしく」

へえ〜レビニューノちゃんか、ルーニヤより優しそうだしまた今度話してみようかな

「へ〜ご主人様は私が怖いんですか〜、失礼ですねホント」

「ああ、もう、心の中の読むのせこいよ〜怖い怖いルーニヤとてもこわい〜」

ふふ、こんぐらい言わないとやっぱ駄目だね

「そうですかそうですか、そんなにもお仕置きが欲しいのですね、ふふっ、あとで楽しみにしといてくださいね」

あ、やべ……どうしよう、とりあえず謝ろう

「ごめんなさい!!許して?」

「そうですね、許しません!!お仕置きは絶対します」

「ぶーぶーやっぱ優しくな〜い」

「コバトちゃん頑張ってるね、そっだ一緒に街行かない?すごく楽しいよ?」

「街?イクイク!!ルーニヤちゃん行っていいよね?」

「そうですねじゃあ4人で行きましょうか」

「やったあ〜〜〜」

お出かけお出かけ〜どんなだろう街は、絶対楽しい場所に違いない!

やったやった〜

「もう、ご主人様張り切り過ぎです、まあ可愛いし許します!」

「はう、可愛い?私が?」

「はい、とても可愛いです、胸がほとんど無くても可愛いです」

「な、無い言うなああ〜〜〜!!!少しあるもん!ちゃんと膨らんでるもん!」

ひどいなルーニヤの鬼!鬼!悪魔!

「ご主人様?今すぐお仕置きしてあげましょうか?」

「じめんなさあい…」

うっうっ〜お仕置き怖い…怖いよう、

「でも、コバトちゃんは可愛いね、背がちっちゃいし」

「う、ルーニヤ?私は背が低いの?」

「そうですね、私よりとても小さいですからね、胸も…」

「そっか…小さいんだ…胸はほっといってください」

ホント、いじわるなんだから、ドSルーニヤめ！

「じゃあ行きましようか、コバトちゃんも機嫌直してね、では、行きましようかサシユラン様」

「ああ、そうだな」

そう言っつて私達は城？を出て行つた

「ご主人様、迷子にならないようにしっかりと手をつなぎましようね」

「ル、ルーニヤ！子供扱いしないでよ、街で恥ずかしいじゃないの」

「大丈夫です、パツと見ればご主人様、子供ですから」

なにが子供だしっかりした…子供でいいや

「でも、コバトちゃんが背低くて良かった、だって上目使いで見てもらえるし」

「うう、でもいいもん！」

そんな会話をしていたらいつの間にか街に着いていた
案外近いらしい

街は楽しいね？

街についてから私達はとりあえず案内をしてもらいながら店に売っているものを見ていた

「ねえねえ、お腹すいちゃった、お昼にしない？」

ああ、お腹減った…減った減った！！

「そうですね、ご主人様は転生したから何も食べませんもんね」

「そうか、では、何が食べたいかな？俺が奢るからなんでもいいぞ」

「ありがとうございますサシユラン様、では何を食べましょうか？」

うーん、そういえばこの世界はどんなごはんがあるのかわからな
いや

「ご主人様、大丈夫です、この私が良いお店を知っています」

「おおールーニヤ助かる、サシユランさんそこでいいですか？」

「ああ、じゃあルーニヤちゃん、何処にあるか教えてくれ」

そう言ってお店のある方に移動している、もちろん自分は後ろを付いて行くだけ

「コバト様？どうかなさいましたか？」

「え、ああいや別にちよつと考え事」

「そうですか、で、何を考えていたんですか？」

「えつと…魔法の使い方とか武器とかのことかな」

そう、気になってしょうがないのだ、いざとゆう時がいつ来るかわからないから

「そうですね、まあ武器は戦いた時、出したいときに念じれば出ます、出る武器は人それぞれですが最初の時の武器はあなたの属性を表します、それ以外の属性も使えますが、自分の属性は攻撃力、防御力ともに高いのです、また特別な技も属性ごとにあります、魔法の属性は種類がたくさんありますので
自分の属性がわかってから調べても遅くは無いです」

「へへそんなんだ、ありがとレヒューノちゃん」

「いえいえどういたしまして、えへへ」

「あらら？ご主人様？レヒューノちゃんと仲が良いですね、でも私を不機嫌にさせないように気を付けてくださいね」

「え、うん、わかった」

「分かったらよろしい」

そんな会話をしているとすぐおいしそうな匂いのする店があった

「ここかな？じゃあ入ろうか」

そして後が続いて入っていく

今は自分の部屋に居る

「やっぱりベットは良いな〜…疲れたし少し寝ようかしら…」

それにしても街はきれいだったゲームのような世界が広がって

るのだから

ガラッ

「失礼します」

ん？今、声より入ってくる方が早かったような

「あら、そうだったコバト？」

「うん、てか呼び捨てになってる…まあ別に嫌じゃないけど」

「そうですか、良かった、だって、私の方が上に見えるから」

「え、ええ？私が下なの？なんで」

何でだろうかメイドのハズだよなルーニャ

「だって私の方が背が高いし、胸も大きいから、それに私がお世話担当ですよ？」

「ええ〜身長の問題？お世話担当だからってそんな何にも出来ないような風に言わないでよ〜できることだったあるんだから…：…ひどいよう、胸の事でいじめるよう、やっぱルーニャは鬼だよ！」

そんな事を気付いたら言っていた…あ、やばい

「そうですか、お仕置きが欲しいですか、じゃあ一つ目は…私と一緒に寝てもらいましょうか」

「えっ！絶対なにかするきでしょー」

「ほらほら早く」

そう言っつて私をベットに入れてそこにルーニヤも入っつて来た
なんだろう、ルーニヤの方が体が大きいせいかわかつかれてる状
態でルーニヤの前にすっぱり入っつてしまっつてゐるのだつた

「うっ、恥ずかしいよ、む、胸は揉まないでえ」

うっっっ感じちやうよ…き、気持ちい…

もう寝よう…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9250z/>

ようこそ異世界へ！

2011年12月29日08時46分発行